

参加無料
＜定員50名先着順＞

第2回北大山岳館講演会

山岳気象と遭難

検証から実践へ

2010年11月20日(土) 13:30～16:30

山岳遭難の多くは気象が大きな要素になっている。

登山に限らず、正確な気象に関する知識と対処方法は
野外活動の基本であることは言うまでもない。

この講演会では、

山岳気象の基礎から最近の知見までを紹介するとともに、
様々な遭難事例から事故の原因を検証し、実践への提案を行う。

＜講演＞

北海道の山岳気象と遭難

－平地と山岳の気象の違いと最新気象情報の活用－

中村一樹（北海道大学 大学院地球環境科学研究所 グローバルCOEプログラム 環境教育研究交流推進室
GCOE上級コーディネーター、気象予報士、日本気象学会会員、日本雪氷学会会員）

富士山における大量遭難の実態

－特異な雪氷現象と遭難の社会的背景－

安間 荘（法地学研究所代表、北大山の会会員、日本山岳会会員）

＜特別講演＞

北海道の登山に貢献した日本山岳会の先輩達

高澤光雄（登山史研究家、札幌山の会会員、日本山岳会会員）



会場 北海道大学山岳館

札幌市北区北18条西13丁目〔北大構内北西隅「北大恵迪寮」東側〕

【TEL】山岳館 011-716-2111（内線5138：水曜のみ）
携帯 090-6870-5120（中村）

【e-mail】sangakukan@aach.ees.hokudai.ac.jp

【URL】http://aach.ees.hokudai.ac.jp/sangakukan/

主催：北海道大学山岳館

共催：日本雪氷学会北海道支部

NPO法人雪氷ネットワーク

北海道大学IFES-GCOE環境教育研究交流推進室

後援：北海道大学総合博物館

第2回北大山岳館講演会

山岳気象と遭難

検証から実践へ

北海道の山岳気象と遭難 ―平地と山岳の気象の違いと最新気象情報の活用―



北海道大学大学院地球環境科学研究院 グローバルCOEプログラム
環境教育研究交流推進室 GCOE上級コーディネーター

中村 一樹

《講演要旨》2009年7月、厳しい気象条件の中、大雪山系トムラウシ山で8名の登山者が低体温症で遭難死してから1年が経過した。この事故によって、大きな問題提起がなされたにもかかわらず、北海道では今年も気象に係る山岳遭難事故が発生している。山岳の気象は、言うまでもなく私たちが住む平地の気象に比べて厳しい。経験のある登山者でも思わぬ気象に遭遇し、遭難へと至ることがある。野外経験の浅い者にとっては尚更、言葉ではわかっているものの程度厳しか想像が付きにくい。本講演では、これまでに北海道で起こった気象に関わる遭難事例を気象データから分析し、平地との気象の違いを明らかにする。さらに、近年手に入りやすくなってきた最新の気象情報を使うことで、危険を回避する方法について検討する。

◆プロフィール

1968年北海道天塩町生まれ。1994年名古屋大学大学院理研研究科修士課程修了。2006年10月より日本気象協会北海道支社気象情報課長として北海道内の天気予報を統括。2009年10月より現職。北極域氷河調査、北海道内気象・積雪調査など数多くの調査歴がある。現在は、日本雪氷学会北海道支部の雪氷災害調査チームに所属し、道内の山岳気象・雪崩危険度の予測について研究している。また、自然ガイド養成講座の講師等、気象、雪氷をテーマとした環境・防災啓発活動を鋭意進めている。気象予報士、日本気象学会会員、日本雪氷学会会員。

富士山における大量遭難の実態 ―特異な雪氷現象と遭難の社会的背景―

安間 荘 法地学研究所代表、北大山の会会員、日本山岳会会員

《講演要旨》戦後(1945-2009)、日本で起きた山岳遭難の死亡者数ワースト10の内、4つが富士山で起きている(山森欣一、2010)。その原因の主なもの、1. 疲労凍死(低体温症)、2. 雪崩(表層雪崩、スラッシュ雪崩)、3. 崩壊・落石、4. 突風などによる滑落、転落などに分けられる。明治以後の日本最大の山岳遭難は、1972(昭和47)年3月20日、急激に発達した低気圧による荒天下の東富士御殿場口宝永山中腹で発生した。当日、東富士山域に入っていた登山者数は、8グループ2個人計58名であったが、このうち自力下山できた者22名、救助隊に助けられ生還した者2名、死亡した者24名であった。死亡者は検視の結果、17名は疲労凍死、7名は雪崩による圧死とされた。生死を分けたものは何だったのか、その実態と原因を山岳気象の視点から検証すると共に、当時の社会背景の下での登山界の姿と事故の残響を考察する。



◆プロフィール

1936年静岡県生まれ。1955年北大山岳部入部、1959年北大理学部地質学鉱物学科卒業。現在、法地学研究所代表取締役、(社)静岡県環境整備資源協会副会長。工学博士、技術士(応用理学部門、林業部門)、北大山の会会員、日本山岳会会員、日本雪氷学会会員。

□海外遠征等：1962年 北大チャムラン峰遠征。1965-66年 パタゴニア遠征。1970年 日本エヴェレストスキー探検隊。1975年 北極地域学術調査隊。1982-83年 北大厳冬期ダウラギリI峰(8167m)登山隊隊長。

特別講演

「北海道の登山に貢献した日本山岳会の先輩達」

高澤 光雄

1932年北海道生れ。1951-1992年丸善札幌支店勤務、日本山岳会北海道支部元副支部長、登山史研究家、日本山岳会会員、日本山書の会会員、日本山岳文化学会会員。

北海道の山で活躍し、縁者と交流のあった「北の山」で知られる伊藤秀五郎、山岳画家の坂本直行、イグルーを日本に伝えたイタリア人フォスコ・マライニ、ピッケルの名工門田茂ら23人の足跡を紹介する。